赤野城と雄城氏

安部和也

一、赤野城について

平成五年から実施されている角埋城（玖珠町）の発掘調査に影響されて、特に中世城に関心は向けられるようになった。県下の中世城の存在は、その地と大友氏とのかかわりを物語るもので、それを無視してその地域の中世史を論ずることは出来ない。

中世（鎌倉幕府成立から戦国時代の終わり）は武士（戦争）の時代と云われ、別府に城が存在していたかどうか、もし存在するならばその城はなんの目的で構築された城であったかを考察することによって、大友義鑑、義鎮、義統時代の別府の果たした役割を推察出来ると考えられる。

城は戦略、戦術上の要請によって生み出されるもので、築城目的の第一は交通を遮断して敵の浸入を防ぐ防衛戦術上の拠点造りと、第二は防御の最終の拠点造り（篭城などを予想）である。これについては、南北朝以降領民が戦争に巻き込まれることが多くなったため、領民の避難拠点（戦略上）としての城砦造りも指摘されている。

県下には、大小あわせて三六三ケ所の城址があるといわれているが、昭和四九年（一九七四）に大分県観光休養課が二三七ケ城を、調査発表した大分県発行の『大分の旅シリーズ城と城下町』では、別府については一覧表に次のように記されている。

城と城址市町村別一覧表

別府速見郡内　二二ケ城

別府市	三
日出町	七
山香町	一二

（日出町山香町のすべての城址は、城名と注釈がなされているのに、別府の分については全く何も記されていない。これは城址を認定する遺構、文献がないためと考えられる。）

別府の城址・三ケ城とは一体何処を指しているのか、城に関する本で探してみた。其の結果、別府の城址としては『日本城郭大系』に次のように記されている。

赤野城　別府市浜脇

別府市浜脇温泉の東南に赤野という地名がある。

天正の頃雄城右京亮長房の居城。

残りの二城とは、立石城（堀田）大友浜脇館（浜脇）が考えられるが……？

赤野城の構築場所は、『日本城郭大系』では赤野としているが、『速見郡史』赤野城址の項では次のように記述している。「…当城の位置明らかならざるも、今の穴守山ならんか。……然るに其の南赤松村の下に赤野の地称あれば、城址の位置何れとも判じ難きに似たり。…」

また、赤野城は赤松にあったと固持する研究者も存在するが、いずれも指摘する場所は、未だ城址遺構が発見されず物証に欠けているのが現状である。

穴森山の場合、古代人が墓場として使用した山との伝聞があるが、そんな山に中世武士が築城するとは考えられない。又赤松に関しては、南北朝時代の高崎山城攻防戦に南軍北軍が、それぞれ本陣を敷いて戦ったことは戦記書に記されているが、赤松に城があったとの記載はどの史書にもない。地元古老の話でも、赤松に城が有ったとは未だ聞いたことはないとのことであった。

『日本城郭大系』に記されている赤野の地は、明治以降の国道、日豊線の開通、海岸埋立て工事等によって城があったとする「まい山」は完全に削り取られ、その跡地は現在国道十号線とＪＲ日豊線が走り、崖下には市営住宅が建てられており、昔この上に城があったとは信じられない様変わりをしている。

もし「まい山」に赤野城があったとするならば、一回の城址調査を受けることもなく、地上より姿を消したことになる。今となっては幻の城になってしまってどうすることも出来ないと考えていた。ところが昨年（一九九

六）の秋「健康ウォーク」の途中立ち寄った赤野の丘で、城址遺構の一部らしいものを発見することが出来た。

（説明は後記）

赤野城のことは、南北朝時代のどの史書戦記書にも、全く記されていない。南北朝時代が終わって、一二〇年余り後の永正一三年（一五一六）朽網親満が、大友家に謀反をおこし高崎山城二の丸に布陣したとき、鳴川口（現在の両郡橋バス停付近）から大友軍が高崎山をよじのぼり朽網軍を敗走させた有名な鳴川口合戦記にも、赤野城のことは全く記されていない。ということは、赤野城は当時まだ構築されていなかったと考えるのが妥当ではないだろうか。

では何時頃赤野城は構築されたのか……その目安となる事件が大友家に起きている。それは大友家跡目相続争いの「二階崩れの変」（天文一九年・一五五〇）で、義鑑の長男義鎮が一〇名余りの近従に護られて、浜脇館で湯治中にこの事件は起きた。この変の報告を受けた義鎮は、立石城（堀田）に入城したとされている。赤野城がもし構築されていたならば、浜脇館の義鎮を護るために城兵はなにをさしおいても真っ先に駆け付け、義鎮を赤野城に迎えて反義鎮派の攻撃に備える筈なのに、その史実も口伝も存在していない。

浜脇館の義鎮は、反義鎮派の二十数名の刺客に襲われヤットのことで立石城に入城したとの通説も存在するが、この話にも赤野城のことは皆無である。

これらの話を総合して考えると、赤野城の構築は「二階崩れの変」以後となりそうである。

『大分県郷土史料集成』筑紫諸家興廃記（上）に、大友の城について次のように記されている。

「豊後諸氏　都て豊後國中にも二三七人の城主あり
その外六ケ国の幕下大小城主は難興計と
云う」

天正時代の大友家臣で城主たるもの二三七人と記されている。ということをそのままとれば、豊後領内に二三七城が存在していたことになる。これらは中国の毛利元就の豊後侵入に備えて、急遽構築がなされたものと考えられる。

もしこの中に赤野城が含まれているとすれば、西街道の要所である赤野峠に城（砦）を構築して、毛利軍の府内侵入を阻止する戦術上のネライがあったとみるべきであろう。

中国の瀬戸水軍が、前々よりいかに大友氏の脅威であったかを示した警告文書（竹田津文書）が、大友義鑑より国東の浦部衆に天文二年（一五三三）に送られている。

『豊後国東半島史』によれば

天文二年一二月一六日　大友義鑑より

「…近々賊船（大内水軍）立下り所々に於いて狼藉するから警戒せよ…」と、「近々～警戒せよ」との内容で翌三年正月一三日にも、警告文書（岐部文書）が出されている。

これに対して天文年間の大内氏豊後侵入に対抗して活躍したのは、浦部衆（水軍）を有する国東の武士団であった。

当時は水軍として独立したものではなかつたが、その任に当たったのは沿岸浦々の舟手であった。当時の大友配下の浦部衆は海部衆、国東浦部衆、大分湾浦部衆に代表される。これらの浦部衆は大友の水軍として、外敵の海上よりの豊後侵入を阻止するとともに、大友氏の海外貿易に従事していた。

国東水軍の顕著な活躍は、国東田原、都甲、木付の浦部衆が応安四年（一三七一）九州ただ一つの北朝方大友氏が篭城していた高崎山城に、九州探題今川了俊を入城させたことだという。（『国東半島史』）

下って大友義鎮の時代に入ると、河野水軍を配下に持った毛利元就の脅威にさらされた義鎮は、豊後領内の浦部衆を水軍に仕立てることと、併せて城砦の構築とに奔走したことが考えられる。特に別府湾においては別府浦部衆を水軍に仕立てて、木付（杵築）、真那井両水軍と共同して別府湾の護りに当たらせるために、急遽浅見川の河口丘陵地に大友の番城・赤野城を構築した。

併せて立石城、浜脇館の補強修復をも行って、毛利軍の府内侵入（陸海両面）に備えたのではないだろうか。

赤野の丘に城址遺構らしきものを発見したことは前記した。

その遺構が事実であれば、毛利軍の浸入に備えて構築

されたものと考えられる。それは、城内削平地（馬場）とおぼしき土地（山家一〇組・大字浜脇字赤野四三番・所有者同所の加藤氏）の北東の隅にある虎口（入り口）土塁とおぼしきもの（築城当時）の一部である。

土塁の形態

前面（城外側）は石垣　　背面（場内側）は土盛り

側面（通行面側）は石垣

（石垣は自然石の野面積みである）

土塁計測値

高さ一五〇センチ　　長さ五八〇センチ（現存分）

底辺幅三五〇センチ　　頂辺幅一〇〇センチ

この土塁の城外側は勾配のきつい石垣（石塁）に、城内側は勾配の緩やかな土塁となっている。

城外側を石垣にしていることは、合戦に鉄砲が使用されてからの構築とみられる。

大友氏と毛利氏との抗争は、義鎮が将軍義輝より豊前、築前両国の守護職に任命された永禄二年（一五五九）の秋、毛利軍の門司城攻撃で九州進行が始まった。これに呼応して、豊前築前の反大友の諸将が大友軍を離反して毛利軍に加わったことなどで、大友軍は終始苦戦を強いられ一時は豊前（現在の行橋市か）まで退却した。

永禄七年、将軍義輝の仲介で大友毛利両氏は和解が成

立した。

永禄一〇年になると義鎮配下の築前、築紫、龍造寺氏等の各将が義鎮に反旗をひるがえしただけでなく、大友一族の高橋鑑種（築前宝万城）、立花鑑載（築前立花城）も毛利とはかって義鎮に背いた。築前地方での攻防戦が一進一退のとき、背面の敵尼子氏の攻撃を受けた元就は、義鎮と和して兵を引き上げた。その後元就の尼子氏との抗争は、織田信長との抗争に拡大し対織田に全力を傾注を強いられたため元就の九州進出は中断した。元亀二年（一五七一）元就の死去によって一二年間続いた毛利氏との抗争は終結した。（『大分県の歴史』『大分の歴史』）

二、赤野城主について

（一）雄城氏

寛政戊午（一七九八）豊後岡藩中川久持候侯の命によって豊州志編纂に着手した唐橋君山（世済）は、豊後八郡を二年の歳月をかけて巡視、それぞれの地に伝わる旧史口伝及びその地の沿革を調査して『豊後國志』を編纂した。その巻の三（速見郡）人物欄に、赤野城主について次のように記されている。

「雄城親重…称若狭守　為赤野城主　明徳庚午　冬卒
雄城長房…称右京亮　為赤野城主　天正庚午　従役於日州　臨陣死」天正時代庚午年は無いが日州の役は天正六年（一五三七）

赤野城主と記されている雄城氏の出自について検討してみる。

大友氏が豊後に下向して土着する以前から、豊後には大豪族大神一族・清原一族・日田氏・紀氏等が勢力を張っていた。その中の豊後大神氏は阿南・植田・大野・臼杵の各氏に別れ、各氏はそれぞれの所領地名を名乗って、強力な武士団を形成して大友家を支えた。

当時の武家社会は、惣領制的結合の下で所領を分割相続する慣わしで、所領地を譲り受けた庶子は新所領地に定住して、その土地の名を苗字とした新しい家を興し鎌倉時代以降独立する傾向を強めていった。この分割相続制度は、所領を細分化して武家の窮乏化の原因となったため行われなくなり、嫡子単独相続制へと転換していった。

大友氏が戦国大名として成長するにしたがって領内の武士団は、好む好まざるに関係なく大友家臣団に組み込まれていった。その結果家臣団は、大友一族の六二家からなる御紋衆、國人衆の大神氏系緒方一族三七家からなる國衆、その他の一五〇家からなる新参衆に編成された。国衆の二番目に掲げられ（「豊陽志」）ている雄城氏は、大分郡稙田郷を所領地とした稙田氏の庶子家として、植田郷の中の雄城（後の雄城村）を所領地として、新しく雄城家を興したものと思われる。当時の稙田郷を『大分の歴史』第二巻では、現大分市植田と大分郡野津原町としている。

『大分県の歴史』（渡辺澄夫氏著）に記載されている豊後大神氏略系図によれば、稙田有綱（一二世紀末）より吉藤名は清綱、光吉名は遠綱、上義名は有綱、行弘名は親綱に譲渡している。その中には雄城地区を表わす「名」は判別しがたいので、雄城氏はいつ興ったか判断することは難しい。

『大分市史』に記されている雄城氏関連記事を要約すると次のようになる。

「南北朝時代（一四世紀）の雄城城（棟方城）は、南朝方の攻撃に落城しなかった。一五世紀から一六世紀初めにかけての雄城氏は、府内の城下町に居住する家臣ではなく、所領地雄城の城館で家の子郎党と共に生活しておった。大分郡に存在する大友家の有力家臣団は、戸次、豊饒、雄城、寒田、大津留の各武士団であった。」

それから判断すると雄城氏の誕生は、一三世紀から一四世紀が考えられる。

『豊後國志』巻三の仏寺欄に次のように記されている。

崇福寺　「…不肯禅師所創。雄城氏世為墳寺…」

付記

雄城姓で史書に記されている者を記す。

『豊後國志』

雄城若狭守親重　雄城右京亮長房

『大分近世文書』

「大友御家中之面付」御附人并一城主面々又は大身

雄城上総守　（年代不明）

『豊後国東半島史』「肥後国に出征せる国東郡諸士名」

雄城宮内少輔

『豊城世譜』「国東郡中諸士面付」

雄城若狭守大神惟光

『大友文書禄』「大友氏老中連署状」

雄城若狭守治景

『同』「天正二〇年朝鮮出陣大友軍着到記」

雄城平作亮　雄城与三郎　雄城兵庫助

雄城左近入道　雄城将監

『同』「於朝鮮国戦死弁病死者名禄」

雄城肥前入道

『同』「石垣原合戦記」（大友傘下武士名）

雄城兵庫

『同』「義統國除後の着到記」（石垣原合戦）

雄城左近入道　雄城将監

『速見郡史』（豊薩軍記外）

雄城弥七郎

（二）雄城治景

雄城氏の中でも雄城治景は、逸材で史書に次のように記されている。

『大友史料』

大友家の老中としての署名在判の文書（天文五・一五三六年八月六日より弘治三・一五五七年三月一三日に至る二二年間・義鑑義鎮時代の大友家加判衆連署状）

天文年間の大友義鑑書状（国東岐部氏宛）

「……猶雄城若狭守可申候。……」　註、雄城若狭守治景この当時国東郡の方分なる可し。

『豊後半嶋史』の記録

「天文一九年　此の年、大友義鎮肥後に出征す。当時従軍して賞せられし国東郡諸氏は次の通り。

岐部能登守、吉弘新介入道、斎藤、雄城宮内少輔等

義鎮より激励される。」

雄城治景は、大友家の国東方分（国東地方司令官）、加判衆（老中）の重職に登用されて、大友家の軍事政治の中枢にいたことが判る。治景の称号には、宮内少輔と若狭守とがある。

雄城親重、同長房の出自は、ともに大分郡植田郷雄城

を本貫地とした雄城治景と同じ豊後大神系雄城一族とみられる。

（三）赤野雄城氏

昭和四一年大分合同新聞社より発行された『別府今昔』には、赤野城主雄城氏の出自について記述されているので、参考までに要旨のみを記す。

「明徳四年（南北朝が北朝によって統一された翌年の一三九三）に、南朝方の忠臣楠木正成の弟正氏の子正業の時に親子三人が赤野に移住し、その子正兼が雄城二郎を名乗り大友一〇代親世に仕えた。高崎山麓赤野城主雄城一族の始祖である。」（赤野糸永家に伝わる系図）

崇福寺開基（『速見郡史』）の雄城親重は、一三九〇年没（『豊後國志』）となっている。南朝方楠木正氏の遺裔雄城二郎の父正業等が、落人として赤野に入ったのは親重が没して三年後にあたる。

「当時の楠木一族は、室町幕府に対する反体制派であり、その一族遺裔はすべて逮捕処刑の対象となっていた。」

（森田康之助著『楠木正成』）

『別府今昔』『楠木正成』に記されていることを事実とすると、大友親世（一三七一～一四一四）は室町幕府に反して、楠木氏の遺裔の仕官を認めたことになる。

雄城親重と雄城二郎とは、同じ雄城を苗字としているが、その出自は別で一族とはいいがたいので、本文では雄城親重系を豊後大神系雄城氏、雄城二郎系を赤野雄城氏と別々に呼称した。

（四）国東の雄城氏

雄城氏を調べていくうちに、国東武士の中に雄城姓の武士が記されているのを発見した。それは「豊城世譜天正年間国東郡中諸士面付」（大友義統配下）の中に、雄城若狭守大神惟光の名がある。惟の字を「通し名」として大神を名乗っているので、宇佐系大神一族の出とみられるも、親重、治景が呼称した雄城若狭守を惟光も呼称しているので、あるいは治景の後継者では…。なぜなら大友家の重臣治景の雄城若狭守の称号を、仮りに希望した者がいたとしても大友本家が許したとは思われない。雄城若狭守の称号は、代々の雄城一族の統領の呼称であっ

たとも考えられるが、前記「大友家御家中之面附」に雄城上総守が記されているので……。

惟光の国東武士は、治景が国東方分をしていた関係上、治景に従って国東武士と共に戦ったがゆえに国東武士として扱われているのであろうが、治景老中解任（一五五八年頃）後も、国東武士として惟光が名を連ねているのは、治景の解任と何等かの関係があるのではなかろうか。

『大友史料』に国東雄城の地名が記されている。

「……如水為赴木付、解垣見之囲、到于熊谷城下雄城……」

この雄城とは、木付から国東治郎丸に到る当時の道沿いで、伊予灘に注ぐ小城川流域の現在小城（武蔵町）と呼ばれている地域である。

小城を出自とする国東小城氏が、誤って雄城氏と記されたのではないかと調べてみたが、国東小城氏の存在は確証を得なかった。武蔵町の内田に小城（コジョウ）姓を名乗る数戸が存在している。この小城家の先祖は内田に転住して呼称変えを行ったのではないかと、内田の九二歳の小城翁に問い合わせてみたが判らないとの返事であった。

（五）雄城親重

南北朝時代の大友家の家臣である雄城親重に、官職名の若狭守の称号がついている。

官職名は、もともとは國司に与えられた称号（守、介、掾、目の四等）であったものが、戦国時代になると単なる名誉の称号となり、称号を大友家の家臣が希望すれば、大友本家に贈物をして承認を受け（名誉を金で買う）ていたという。南北朝時代の称号授与は、九州探題が足利幕府に上申して始めて承認されるもので、大友家より授与されるものではなかった。大友家の家臣で、九州探題今川了俊より称号授与の請願（都甲新四郎の左京進）が、足利幕府に出された記録が残っていることから、親重も北朝軍としての活躍を賞されて若狭守の称号を授与されたとも考えられるが……？

雄城親重について『別府市誌』は、大友八代氏時の従臣で文和三年（一三五四）海宝山崇福寺を再建したと記されている。（『速見郡史』、昭和八年版『別府市誌』）『豊後國志』では明徳元年（一三九〇）に没している。

天皇家と武家が、それぞれ南朝・北朝とに別れて相争った南北朝の動乱に、北朝方についた大友氏はしばしば豊後に攻めこんだ南朝方の懐良親王軍・菊池武光軍と戦った。特に、高崎山城攻防戦は延文三年（一三五八）、同四年、貞治元年（一三六二）、応安四年（一三七一）の四回も行われ、応安四年の戦いは百余度の南朝軍の攻撃にも、高崎山城は陥落しなかったことは戦記書に記されているが、赤野城は勿論赤野の地名さえ、どの史書戦記書にも記されていない。

『大分市史』には、高崎山城攻防戦が行われているとき大分郡稙田郷の雄城城は、南朝方の攻撃に対してよく持ち堪えたと記されている。親重の若狭守の称号が、足利幕府より授与されたものであれば、親重は赤野城主ではなく雄城城主であったのではないかとも思われる。親重の明徳から雄城城主治景の弘治年間に至る約一六七年間史料皆無のため判断しがたい。

親重は、大友家の氏寺・臨済宗荘山万寿寺の末寺・浜脇海宝山崇福寺の開基となっている。

万寿寺の創建は、大友五代貞親が徳治二年（一三〇七）直翁智侃（元享二年・一三二〇没）を招き、万寿寺の開祖とした」（大分近世文書万寿寺）となっている。

『禅文化の世界』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館発行）「大分禅宗史年表」によると、智侃（仏印禅師）の大弟子十員の一人不肯正受が豊後に入って禅院を建立したのは応安四年（一三七一）頃となっておるが、万寿寺十門徒牧村神亀山妙観寺（不肯正受開祖、大友氏時開基）は、暦応四年（一三四一）開山（『大分市近世文書』『豊後國志』）になっている。

崇福寺の開山（不肯禅師開祖、雄城親重開基）は一三四一年頃から一三七一年頃といえる。

『豊後國志』では、親重を赤野城主としているが、南北朝の親重時代には赤野城は構築されていなかったと思われるので間違いが考えられる。

（六）雄城長房

長房に関しての史料は、『豊後國志』に赤野城主で天正六年（一五七八）の日向遠征に従軍して戦死したこと。『日本城郭大系』に天正時代の赤野城主であったことの

みである。

「大友公御家覚書」が、日向の戦いの戦死者（武士団）を記しているので、参考に記してみる。

「……豊後の歴々数輩討死、田北鎮周一族郎党百二十余人、佐伯宗夫父子一族郎党百六十余人、斎藤鎮　同進士百三十余人、臼杵新介同惣衛門尉、柴田何右衛門尉、此外戸次、志賀、一万田、吉岡、古庄、朽網等が一族郎党討死其数を知らず。……此合戦は天正六年十月なり。」

「赤野雄城氏」の項で記述した如く、長房の先祖は楠木正成の弟和田（楠木）正氏との説があるので参考として、楠木和田氏の系図（尊卑分脈）と楠木和田氏一族の戦死（『太平記』）を簡単に記してみる。

赤野雄城氏の出自は、河内の楠木氏（『別府今昔』）で、その楠木氏は敏達天皇四代目の孫・橘諸兄の末裔（『太平記』）である。他方ＮＨＫ「堂々日本史」（六月三日放送）では、正成は河内の悪党（荘園領主より己の権益を守るために領民が武装して集団を組む）の頭であったと説明がされた。

南北朝の終りに碩学洞院公定によって編纂された、系図の原本といわれる『尊卑分脈』に記されている楠木氏系図では、楠木正氏は和田七郎を名乗り正季と改名している。正氏には、行忠（新兵衛尉）と賢快（新発）の二子が記されている。

『太平記』「巻の一六」には、正氏（正季）が建武三年（一三三六）湊川で「七生報国」の歌を詠んで兄正成と刺し違えて自決した様子が記されており、巻の二六では、貞和四年（一三四八）四条縄手に於いて楠木帯刀正行舎弟正時と共に、和田新兵衛正朝（行忠と思える）と和田新発意賢秀（賢快と思える）が、討死し和田、楠木が一類皆片時に亡びはてぬれば……」となっている。

武家には各家毎に独自の家紋（旗差し紋）を持ち、家紋は氏族の誇りで庶家で苗字を変えても、総領家（本家）の家紋を継承する慣わしであったので、家紋によって出自氏族が判り同一地方で同一家紋であれば、苗字は異なっても同族と考えられていた。楠木、和田の両氏は、菊水紋を使用しているが、もともとは橘紋であるので、赤野雄城氏が楠木和田氏の子孫であれば菊紋か橘紋を使用したと考えられるが……？

大正八年、楠木氏の子孫に追賞叙勲調査が行われた（『別府今昔』）が、赤野雄城氏一族が認められた話は聞いていない。となると赤野雄城氏の存在には疑問が残る。

余談になるが南朝正統論、忠臣楠木正成賞賛論の『日本外史』（一八二七、頼山陽著）が世に出ると、わが家こそが楠木正成、新田義貞等の南朝方忠臣一族の末裔だと自称する者が続出しその系図の大部分は、「尊卑分脈」にこじつけて延長したか又は補遺したものであった。（姓氏家系辞書）

三、結び

大友義鎮が、赤野城を毛利軍の府内侵入阻止の拠点造りを第一の目的として構築。雄城右京亮長房（豊後大神系）を府内から番将として派遣、別府石垣周辺の給人を勤番させた。ということが考えられる。

同じ番城の鹿越城について、福川一徳氏は次のように記している。

「日出と山香の境に構築された鹿越城は、賀来中務少輔谷川三郎兵衛尉が番将として府内から派遣されており、勤番したのは日出山香周辺の給人であった。」（『戦国武士の系譜に関する一考察』）

鹿越城（大友直轄地辻間）は、大内軍の侵入阻止を目的として構築されておる。赤野城は、毛利軍の侵入阻止のために構築された。とすると「赤野城は大友の番城で、浜脇は大友氏直轄地であった。」（仮説）と考えられる。

以上

参考史料

豊後國志　大分県地方史　大分県郷土史料集成
大友史料　大友文書録　大分市近世文書　速見郡史
別府市誌　大分市史　豊後国東半島史　国東町史
安岐町史　西国東郡史　大分県の歴史　日本城郭大系
日本城郭全集　城と城下町　郡書類従　姓氏家系辞書
姓氏家系大辞典　戦国武士の系譜に関する一考察
日本地名辞典　大友宗麟　太平記　別府今昔　他